

持続的農業をめざした農学の新展開

—日本農学アカデミー第3回シンポジウムについて—

中井 弘和

前日本農学アカデミー学術情報委員会委員長、静岡大学副学長

日本農学アカデミー第3回シンポジウムが「持続的農業をめざした農学の新展開」のテーマで去る6月6日日本学術会議で開催された。21世紀のスタートを切るにふさわしい「持続的農業」をキーワードにした本シンポジウムに対する人々の関心は深く、多くの参加者をえて、成功裡に終了することができた。そのことを喜び、以下のように総括し報告する。

1. シンポジウム要領

テーマ：「持続的農業をめざした農学の新展開」

日 時：平成13年6月6日午後1時30分～5時10分

場 所：日本学術会議 第6部会議室（6F）

主 催：日本農学アカデミー

後 援：国立大学農学系学部長会議・日本学術会議第6部・農林水産省

シンポジウム次第：

総合司会：松田藤四郎（東京農業大学理事長）

開会のあいさつ：「日本農学アカデミー3年の歩みと展望」

長堀金造（日本農学アカデミー副会長/日本学術会議17期第6部長）

基調講演：「農業経営をめぐる持続的農業の諸側面」

三輪睿太郎（独立行政法人農業技術研究機構理事長）

パネル討論：「持続的農業をめざした農学の新展開」

パネリスト：

野口 俊邦（信州大学農学部長）

祖 田 修（日本学術会議第6部幹事／京都大学教授）

陽 捷 行（独立行政法人農業環境技術研究所理事長）

コーディネーター：

中井 弘和（日本農学アカデミー副会長／静岡大学副学長）

2. シンポジウムの概要および成果

シンポジウムに先立ち、長堀金造氏から、日本農学アカデミー設立からの3年を振り返り、その成果と新しい時代への当アカデミーの果たすべき大きな役割についてメッセージがあった。人類の生存基盤である衣食住資源の科学、人間・土・地球その

ものと食に関わる科学としての農学は、今後益々重要になるに違いない。当アカデミーは、その農学の豊かな発展に指導的役割を果たしていかなければならぬと言った激励が込められていた。

三輪睿太郎氏による基調講演「農業経営をめぐる持続的農業の諸側面」では、戦後の技術改革が日本農業の発展をもたらした経緯を省み、新しい時代に合う農業の持続的発展の在り方を探りながら、生命や環境を視野に入れるのは当然としても、農業はやはり、経営的に成立し、リアリティをもって受け止められるものであるべきことが強調された。その中で、①持続的農業の概念、②生産効率と環境保全のバランスがとれるような新しい農業技術の開発の重要性、③新しい研究技術開発に際して、研究投資に見合う成果を急に求めないことが重要、④麦や大豆栽培も視野に入れた水田利用の高度化によって、食糧の自給率を上げる、⑤農業における地域性の重要性を認識するとともに、なお地域にかくされている多くの農家の経験や技法を探し出し、拾い上げて普遍的な技術を創っていくことが大切。農業にはなお多くの可能性が残されていることを信じ、それを引き出して農家に夢を与えていくことができる等、が強調された。

パネル討論では、野口俊邦氏は、大学の教育研究に携わり、森林の科学に関わる立場から、祖田修氏は学会を母胎とする日本学術会議会員であり、大学では「農学原論」を講義し、持続的農業に関わってきた立場から、また陽捷行氏は、農業環境科学研究所で、地球環境を視野に入れた農学研究に

関わる立場から、それぞれ当該テーマについて発言し、討論を行った。

野口氏は、森林のもつ経済的価値と環境保全的価値について豊富なデータを示して語り、農業の持続性に及ぼす森林の有する機能の農学に与える想像を超える効果を強調するとともに、農業のもつ多面的機能の重要性を指摘し、多面的機能をよりよく發揮する手法は持続的農業の確立と深く結びついていると述べた。

祖田氏は、持続的農業をめざした農学の在り方について、全体的な観点から考察し、生活価値、生態環境価値、経済価値それぞれの価値の総合を実現すべく新しい農学の基本的体系を提案した。生命と環境を保全しながら、農業生産性も向上させる方策について倫理や教育の有り様なども考慮した広い視野から論じた。

陽氏は、地球環境の危機的状況を最新のデータを紹介しながら、環境を保全する持続的農業とは何かについて解説し、具体的な多くの提言を行った。そこで、土のもつ人類生存のための意味と重要性、経済的視点重視の発想から脱却し、俯瞰的視野から農業の有り様を考えることの重要性等が強調された。

以上3名のパネリストによって提言されたことは深くかつ多岐に亘るが、本パネル討論からかいつまんで次のように結びを示しておこう。

①農学は本来、地球・人間をベースにした学問分野である。それ故にこそ21世紀は農学の時代と言える。

②持続的農業はある意味で、これまで(20世紀)地球環境を破壊してきた人間と

地球(自然)との和解の手段である。

③今は農学の重要性を確認するとともに、我々農学に関わる者の責任の大きさを自覚しなければいけない。農学の枠組の拡大とともにその内容を深化させていく努力が必要。

なお、おわりに、総合司会の松田藤四郎氏からは、日本の近代農学の創始者・横井時敬博士の一つの警告「農学栄えて農業滅ぶ」が紹介されて、我々農学者は、今こそこの言葉に真摯に耳を傾ける必要があるとの思いを強くさせられた。

当日は、翌日から開催される農学系学部長会議に出席予定の学部長はじめ、大学関係者、研究所や試験場等の研究者、民間企

業の研究者、学生等総勢115名が参加して盛会であった。「持続的農業」というキーワードのインパクトの大きさを実感させられた。シンポジウムの内容も充実して良かったが、パネル討論におけるパネリスト間の議論の時間が不足したのは一つの反省点であった。今後はこの経験を生かし、農学アカデミーとしてさらに充実したシンポジウムを開催していくことを期待している。

この3年間、学術情報委員長として働くことができたこと、また、この間大きなご支援が与えられてきたことを喜び感謝致しつつ、以上、簡単にご報告申し上げる。

